

インターネットマガジン編集部 編

i n t e r v i e w

重油流出事故を伝えた人に聞く

# ウェブは ボランティアを 飛躍させる

日本海沖で起きた重油流出事故では、インターネットが被災救援活動を伝えるメディアとして活躍した。重油流出事故関連でもっともアクセス数の多かったサイトの作成者である、非営利組織「リスポンス協会」の草島慎一氏に、重油流出事故から1年が経つとして、今の感想と、他の活動についてお聞きした。

Photo: Nakamura Tahrū

## 重油流出事故について

1997年1月に日本海沖で重油流出事故が起きたとき、インターネットはボランティア情報を伝えるメディアとしての力を発揮した。各企業や個人、非営利組織など、さまざまなページが作られ、多くのボランティア希望者はページを参考にして現地の状況を知り、ボランティアの情報を探り、現地の活動に参加した。このようなページの中で、特にアクセスが多かったのが『Save The Coast!』である。数ある重油事故関連のサイトの中で、このサイトが非常に大きい反響を得たのは、情報が充実していることと、新聞やテレビに劣らない速報性を持っていたことが大きな理由である。実際に、このサイトを見てボランティアとして訪れた人も多かった。

「Save The Coast!」のサイトの作成者は、神戸を拠点に活動する「リスポンス協会」(代表：山田和尚)という非営利組織の草島慎一氏である。本誌では97年5月号でお伝えしたが、草島氏はボランティア活動を飛躍させるメディアとしてインターネットを高く評価していた。速報性が高いことと、個人レベルで広く情報を告知できること。インターネットが持つこの2つの特性にこだわったウェブ作りを、彼は心がけたという。

重油流出事故が起きてから1年弱が経とうとしている。もう日本海にボランティア活動に行く人はいない。当時は反響のあった重油事故関連のページも、アクセス数はかなり少なくなってきた。しかし「Save The Coast!」のウェブはまだあるし、草島氏はその他のさまざまな非営利活動の情報をウェブで告知している。それは重油流出事故のときのように脚光を浴びるようなものではない。ただ、その地味な活動を通して、ウェブに確かな手応えを感じていることは今でも同じだ。



多数のアクセスがあった『Save The Coast!』のページ。  
<http://www1.meshnet.or.jp/~response/oil.htm>

草島氏が行っているインターネットの活動の中で、『Save The Coast!』はほんの一部ではない。現在、彼は神戸で震災の復興のために活動しており、この活動もウェブで状況が逐一報告されている。神戸で頑張る草島氏に、重油流出事故のウェブのその後、そしてその他の活動について聞いた。

●重油流出事故で『Save The Coast!』はかなりのアクセス数でしたが、現在はどうですか？

①事故が起きてから、3か月で15万件と多くの人に見てもらったのですが、それから今までで1万件しか増えていません。現在カウンターは約16万件。だいぶ沈静していますね。



ただ、少しの人でも見ていてくれるのだと思い、現在でもまだ続けています。今は、重油関連の事件をまとめた本を紹介しています。また、シンガポール沖や東京湾で起きた重油流出事故についての情報も流しています。

●7月に起きた東京湾の重油流出事故のときにも、事件発生後、数時間でウェブで情報が流れましたね。

①ナホトカの事件で学んだのは、とにかく早く有益な情報を流せば、自然と皆が見てくれるということでした。東京湾のときには、最初に新聞で報道された流出量が誤りだったことがすぐに分かった。結局10分の1の量しか流れていなかったことが分かったけれども、それもウェブならタイムラグなしにすぐに告知で

きる。改めてインターネットの良さを感じました。「東京湾」は大事に至らないでよかったのですけれども、何か起きたらすぐにウェブで告知したいと思っています。

●東京湾の事故は終息しましたが、諫早湾についての告知はいかがですか？

①やはり『Save The Coast!』の中で、コーナーを設けています。署名を募ったり、国会議員にアンケートを配布して意見を集めたりしています。諫早湾については、状況についてはマスコミでさんざん取り上げられていますので、重油流出事故のときは、少し違った手法を使いました。ウェブを見てくれる人に広く意見を募り、それを掲載していきます。双方向の良さを生かそうと思いました。東京まで行って国会議員全員にアンケートを配り、返事を集計して結果を掲載しています。返ってくる数は少ないですけども。また、署名用紙もウェブ上に作りました。

●『Save The Coast!』のサイトが一段落して、現在は神戸で活動されているわけですが、震災関連のページも充実していますね。

①『Save The Coast!』の作成に手間がかかり、『神戸元氣村』のサイトはしばらくアップデートが遅れていたのですが、こちらに戻ってきて、また再始動ですね。阪神大震災から3年経ちますが、復興は終わったわけではない。たとえば、現在、仮設住宅はまだ約2万8千戸残っている。そこに住む人にとっては、まだ震災が続いているんです。恒久住宅への移動は、行政からの支援で促進されていますが、それでも間に合わない。たとえば、恒久住宅に移り住む際に、どの地区に住むかという抽選が行われるんですが、昔自分が住んでいた地区にこだわりすぎると、抽選に外れやすくなる。そうして、次の抽選まで待たなくてはなりません。現在も3回目の抽選が行われようとしています。仮設住宅に住む人は心配で心配で仕方がないといった風ですよ。もう何回も抽選に洩れている人もいますし。仮設住宅は壁が薄くて、隣人との間でトラブルが起きたり、ノイローゼ気味になっている人も多い。酒を飲んだりとか。お年寄りも多いですね。

●仮設住宅の中でいつのまにか亡くなったのに、しばらくの間だれにも気付かれない「孤独死」についても、ウェブで取り上げられていますね。

① 仮設住宅に住む厳しさを、孤独死はもっとも端的に表していると思いますから。支援活動としては、「ベルボックス」という緊急発進装置を取り付ける運動をしています。これはNTTの製品なんですけど、ボタンを押すと電話回線を通じて、指定されたところに連絡が入るというシステムです。ぼくらが運営している「神戸元気村」のところに電話が入るようになっていて、気分が悪くなったりしたときには、ボタンを押してもらるように説明する。募金を呼びかけて、そのお金で現在約500世帯に導入しました。本当は行政側でこのようなシステムを取り入れてくれればいいんですけど。

でも、行政には絶対に真似できないようなこともやっているんです。提供する際に、緊急呼び出し装置のボタンに「元気印」というシールを貼るのですが、なぜ「元気印」かというと、単なる緊急呼び出しではなくて、「緊急時以外でも必要なときには押してほしい」という意味を込めているからです。仮設住宅にいと、話し相手も見つからず寂しい思いをしている人が多い。話し相手になってあげるといっても、ボランティアの大事な要素なんです。



『神戸元気村』のページ。  
他のページへのリンクが掲載されている。  
<http://www1.meshnet.or.jp/~response/index.htm>

● 震災関連では米も募集していますね。

① 「3ライス神戸」という運動をやっています。仮設住宅に住む人にいいものを食べてもらおうと、毎月3千世帯に向けて3kgの米を届けています。これはウェブでも告知しています。米はやはり食の基本ですから、非常に喜ばれますね。仮設住宅から恒久住宅に引っ越した人にも、希望者に届けています。

● ウェブでの告知では、どれくらい反響がありますか？

① 通算で大体、20件くらいですね。新聞などで紹介されるのに比べると、やはり圧倒的に少ない。神戸元気村のページは、『Save The Coast!』より、基本的にアクセス数が少ないんです。やはり、だれもがインターネットを使っているという状況ではないですから。これはしょうがないですね。また、震災から3年が経ち、神戸の震災に関心ある人も少なくなってきた。それは、全国ネットのテレビや新聞で神戸のことを報道する機会が少なくなってきていることでも分かる。神戸に住んでいる人でも、もう震災のときに皆が感じた「一体感」のようなものが薄れてきています。震災のことはもう「終わったこと」と思っている人もたくさんいる。震災からまだ3年と経っていないのに、ボランティアの数はどんどん減ってきています。

インターネットの良さは、そういう忘れ去られたことも伝え続けていけることだけれども、なによりもまだ使う人が少ない。それがもどかしくもありますね。

● 震災関連の告知には、ほかにどのようなものがありますか？

① 仮設住宅から恒久住宅に移る人の中には、引っ越し代も出せない人がかなりいます。そのような人のために、トラックを使って引っ越しを手伝っています。人手がいるので、現在、ウェブで手伝ってくれる人を求めています。今回は、一括募集では最後の募集と言われているので、かなりの数になります。

● 本当にさまざまな呼びかけをしていますね。

① 切実に思っているのは、みなさんにまず行動してもらいたいということ。すべてがすべてとは言いませんが、パソコン通信やインターネットの会議室で、災害について話し合っている人の中には、行動しないで傍観者の意見ばかり述べている人がいる。基本的に、行動してもらおうための情報を掲載するようにしています。

● 今後、ウェブでどのような情報を掲載する予定ですか？

① まず、神戸に関しては先ほど述べた引っ越しのボランティアをしてくれる人の募集ですね。現在、恒久住宅の抽選が行われていて、年を越してすぐに発表があります。そうなれば大規模な引っ越しをしなければならない。何人いても足りないくらいです。

それから、最近では日本のさまざまな河川を見て回っているんです。各地方の「水質」に大変興味がある。日本の河川の水質は、ここ



数年でどんどん劣化してきているんです。ダイオキシンの問題だとか、森林伐採の問題など、解決しなければならぬことがたくさんある。私は長良川河口堰についての情報も告知しているんですが、各地方の水質については、今後、何らかの情報を載せるつもりです。

また、重油流出事故のときにも思ったのですが、他のボランティア団体との連携を図る必要があると思いました。現在、ブラジルのアマソンの緑化運動組織と連携して、森林伐採問題の情報を告知しています。このような活動をもっと広げたい。アメリカには、すごいサイトがあるんです。米国の、膨大な数のボランティア組織のサイトが登録されていて、各サイトに連携している。このようなサイトが日本でも必要だと思う。ボランティア組織のページは日本ではまだ少ない。だからこそ、このようなページが必要だと思うんです。私自身も、今までのノウハウをそのような組織のために役立ててみたい。たとえば、募金をした人への会計報告なども、手紙を使うとかなりコストが高くなります。そのような報告は、ウェブでやればいい。あと、米国のサイトなど見ていると、クレジットカードで寄金のできるところがある。このようなノウハウを日本のサイトにも応用できないかと思っています。

● リスpons協会のウェブを見ていて思うのは、必ず被災地なり、事件が起こったところなり、直接現地に行ってレポートや映像を掲載しているということだと思のですが、本当に日本中のあちこちに行かれているんですね。

① ワゴンに生活に必要な一切を積んで、いろいろなところに行きます。車を運転しているときがかなり多いですね。車の中で寝るときも多いですよ。ウェブのアップデートもできるようにモバイルの機材も揃えています。重油流出事故のときには、海岸でノートパソコンを広げてデジタルカメラで撮った映像を送ったりしていました。

●事務局の電子化についてはいかがですか？

①「神戸元気村」にはマッキントッシュが6台とIBM製のパソコンが2台あります。ベルボックスの提供者のリストをパソコンでデータベース化して、病気持ちの人の場合は、病状や通っている病院の名前、今までベルボックスでスタッフを呼び出した履歴などをデータとして蓄積しています。LANでデータを共有していますが、インターネットの専用線を引いているわけではありません。インターネットに接続する際は、ISDNによるダイヤルアップです。ベルボックスについては、本当は人手がかからないように自動的に病院につないだりするシステムなどを作ればよいという考えもありますが、あえて人がいちいち電話に出て対応するのもいいかなと、最近では思っています。ただ人恋しいからボタンを押すという人もいますし。ボランティアの魅力の1つに、ふだん出会えないような人と会って話ができるということがあります。神戸元気村に集うスタッフも、それを楽しみにやってくる人が多い。私自身も本当にここ3年間の間に、いろんな人に会って、さまざまなことを考えさせられました。

●草島さんがボランティアを始めたきっかけは何ですか？

①きっかけは神戸なんです。それまではアウトドア雑誌の編集をやっていたんですが、震災のときに神戸元気村に加わりました。それから本当にいろいろあったんですね。飯の炊き出しや布団の調達などの基本的な活動から、廃材を使ったアート作品の展覧会とか、被災者を勇気付けるためにコンサートを企画したりとか。本当にいろいろあった。それがきっかけで、自分はこのような非営利活動をしていくべきかなんではないかと思ったんです。

●インターネットを始めたのはいつからですか？

①震災が起きて半年経ったときですね。それまでは、現地で実際に行動しているだけで手一杯でした。インターネットの知識もほとんどなかったんです。でも、手軽に全国に向けて情報を告知できるメディアだということが、詳しい人にパソコンを教えてもらったときに分かった。ウェブの作成も、実際に手本を見せてもらって、「これなら自分でもできる」と思って、始めたんです。重油流出事故のときは、もうすでにインターネットについての知識が身

に付いてた。だから、すぐにページが作れたんでしょうね。ナホトカのときには、「神戸でインターネットを活かせなかった」という反省をぶつけることができた。だからあれほど多くのアクセスがあったのだと思います。

ただ、自分で今運用できているからと言って、パソコンやインターネットは難しくないわけではない。神戸元気村のスタッフは現在8名ですが、この中でウェブを作る人は私だけです。だから、1人ですべてをやらなければならない。ウェブだけを作っているわけではなくて、日々、引越しや米の配達などをやりながら作るわけです。告知活動にばかり力を入れていられない。重油流出事故のときには、手伝ってくれるスタッフをウェブ上で呼びかけ

## interview



たところ、英語版のページを作ってくれたりとか、理系の大学生がクリッカブルマップのように難しいものを作ってくれたりとか、デザイナーが絵を描いてくれたりとか、多くの人を手伝ってくれた。しかし、あのように手伝ってくれる人が短期間で見つかったのも、やはり緊急時だからでしょう。神戸や諫早湾、それからアマゾン緑化運動などについては、地道にやっていくしかないですね。

●非営利組織がインターネットを使う際に障害となる点は、ほかにありますか？

①やはり、まだ機材が高い。元気村のマックはアップルさんに提供していただいたものです。デジカメはカシオさん、プリンターはエプソンさん。そのほか、多くのメーカーに支えられました。震災という大事故でこのような支援が得られたのは非常にありがたいと思っています。ただ、訴求力のあるページを作るには、まだ足りない機材がたくさんある。たとえばやはり静止画よりも動画で現地の状況を伝えたいということがありますので、デジタルピデ

オカメラが欲しいですね。

●ウェブにはほかに、市民活動促進法案(NPO法案)についての情報もありますね。

①非営利組織が任意団体として大きな役割を果たしている米国に比べると、日本はかなり遅れています。国会で成立しようとしている法案も、政府与党は、この法案で市民活動が盛んになると言っていますが、市民活動をしている者にとってはあまり意味がなく、かえって弊害があります。この国でボランティアをコーディネートする非営利組織は、いつも資金不足に悩んでいて、職業としてもまだまだ認められていない。そのような非営利組織を支える正しい法案を作ってもらいたいと思い、ページを作りました。ただ、やはりこのような問題意識を持つ人は少ないらしく、アクセス数は少ないですね。このページも、さまざまな他の組織との連携を強めながら、充実させていきたいですね。

取材を終えて

重油流出事故で多数のアクセスを集めた草島氏だが、お話を聞いて、『Save The Coast!』はあくまでも数ある非営利活動に関する情報告知の中の1つであることが分かった。このほかにも阪神大震災や森林伐採の問題など、さまざまな問題について取り組んでいる。しかし、一方で各サイトのアクセス数を見ると、『Save The Coast!』が160,014件に対して『神戸元気村』は14,758件。諫早湾のサイトは5,213件で、『NPO-ACT』は3,041件である(11月27日現在)。『Save The Coast!』とほかとのアクセス数の差は実に大きい。重油流出事故は、被災地活動におけるインターネット利用が、大きく前進したきっかけと言える事件だが、事故が終息した今、アクセス数は極めて少ない。

ただ、それでも草島氏はウェブを掲載し続ける。いつまた、同じような事故が起きるかは分からない。そのときにすぐに行動できるように。東京湾に重油が流れたときに、『Save The Coast!』のウェブは当然のように、事件が起きてから数時間の間にアップデートされた。草島さんは重油流出事故の経験を経て、ウェブが非営利活動を飛躍させるメディアとして有効だということを感じ、期待を抱いている。有事に備えて常にウェブサイトをメンテナンスし続ける草島慎一氏に、今後も期待したい。

神戸元気村の問い合わせ先  
TEL 078-842-2070



## [インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

**株式会社インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

[im-info@impress.co.jp](mailto:im-info@impress.co.jp)